

中江有里さん

3冊の本棚

先月末、台風の影響で大荒れの天候の中、沖縄知事選挙の投票票が行われました。大きな争点は米軍普天間飛行場の辺野古移設の賛否。結果は否でした。

沖縄に住んでいない者として、沖縄の選択は尊重するのみです。そして同じ日本に住む者として、この問題に無関心ではいられません。そのためには沖縄を知らなければ、と切実に感じました。

沖縄にまつわる本は数多くありますが、遠く沖縄にわたしを近づけてくれた三冊を紹介します。

■石野径一郎著『ひめゆりの塔』（講談社文庫・六八〇円）は、戦後五十年に再々映画化された際、わたしはひめゆり学徒の一員として出演しました。教師を目指す女学生が、学徒動員で従軍する...

沖縄もつと知りた



。女学生たちの若い輝きと熾烈を極めていく戦争が等しく描かれています。

沖縄戦は基地問題の出発点。ノンフィクションも多数ありますが、ひめゆり学徒たちの悲劇を小説で著したところに、本書の普遍性が生まれたように思います。

少し時代をさかのぼって明治時代の沖縄の歴史を記した高橋義夫著『沖縄の殿様』（中公新書・九五〇円）。

琉球処分後、県令（現在の知事）として沖縄に赴いたのは米沢藩上杉家の藩主だった！ 遠く雪国から南国沖縄へやっ



中公新書 319

てきた上杉茂憲が力を入れたのは教育面。離島にも小学校を建設し、人材育成に情熱を傾けました。貧困にあえぐ庶民の経済的自立のために租税を軽くし、事業を起す余裕をと訴えましたが、政府には聞き入れられませんでした。

沖縄に改革を起こそうとした知事と政府、現状と重なる見えませんでした。

■岸政彦著『はじめての沖縄』（新曜社・一四〇四円）は、沖縄を愛してやまない社会学者による沖縄論。「沖縄について、個人的な体験から個人的に考えたこと」を書いてみたかったと著者は言い

ます。特にタクシー運転手との会話には両者の体温や湿度みたいなものを感じました。

本書には幾度も「境界線」という言葉が出てきます。内地と沖縄、本島と離島、アメリカと日本……境界線はどこにでも生じます。見えない境界線を本当に見えなくしてしまわないよう、ともかく考え続けます。途中に挟み込まれるモノクロームの沖縄の風景写真が、思索しすぎて熱くなった頭をクールダウンしてくれるようでした。

沖縄を知ることではきたとして、理解にはまだまだ至りません。少しでも歩み寄り、少しでも理解の域に近づいていきたいです。

（女優、作家）

はじめての
沖縄
岸政彦

